
The Reath

多路出尾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Reath

【Nコード】

N7142Z

【作者名】

多路出尾

【あらすじ】

動物異世界ファンタジー。

リースという、自分の知らない世界に迷いこんでしまった、オオカミのソラ。その世界は、ソラのいた世界とほとんど同じのようで、全く違う世界だった。

精霊と契約しないと、生きてはいけない世界。それがリース。風のオオカミ、ヴォルクと共にリースで生き延びるため、そして自分に隠された謎を解くために、ソラは旅に出ることに。

*pixivでも連載中(・)(

序章・白銀色の闇（前書き）

作者は動物馬鹿です。このお話には人間が一切出てきませんので
ご注意ください。

序章・白銀色の闇

ブリザードという、白銀の雪嵐が吹き荒れる真冬の北極圏。

草原に降り積もった新雪は、遮るものがない大地を舐めるように襲う風によって、空から降り殴る凍てつく結晶と混じり合う。

そして、そこに存在する全てのものを、冷酷な白の世界へと閉じ込めようとする。

生命を持つものが、世界に存在を否定される時と場所。

そのため、足を持ち、地を移動出来るもの、翼を持ち、空を舞うことが出来るものたちは悪夢のような白銀の嵐を避けるため、早々に雪風が弱まる森林の奥深くへと避難していたはずだった。

しかし、逃げそびれたのか、それとも何らかの理由があったのか。

……この極限の世界に蠢く黒い点が、一つ。

強風に翻弄されながら、雪にその身を埋めそうになりながら、だがしかし、一步一步確実に前に進んでいく、真っ白の世界にぽつんと存在を示す小さな小さなしみ。

それは、まだ成体に成り切れていない亜成体といえども、多少小柄な印象を与える、灰銀色の年若いオオカミだった。

その灰銀色の小さなオオカミ　この春生まれたソラにとって、初めての冬だった。

一応、群れのリーダーである両親や、群れを形成する上で重要な立場にいる年上の兄妹たちから冬の恐ろしさは伝え聞いていており、彼女自身その怖さを知っているつもりだった。

「極限の寒さ」「白い闇」「風の音のしかない世界」……。口々に言う言葉は違っていたが、幼心なりに、なんとなくだが「生きていく中での試練の1つ」だと感じていた。実際に、1つ上の兄の弟妹たちは、前年の厳しい冬を生き延びることが出来なかったという。

あたしも、兄ちゃんの弟妹みたいになっちゃうのかな……。

横殴りに吹き付けてくる銀色の悪魔と必死に格闘しているうちに、いつの間にかソラは自分の家族と、群れと、仲間とはぐれてしまっていたことに気付いた。

見た目はタンポポの綿毛のようにふわふわで優しいのに、実際には容赦のない冷たさで襲い掛かってくる「雪」と呼ばれるもののせいで、三步先は何も見えやしない。目に映る景色は、白銀の世界。ただそれだけだ。

遠吠えで、この何も無いような世界のどこかにいるだろう群れに呼びかけても、まだチビで子供で大人のように通る、鋭い声を持たないソラの声色は、風の音に掻き消されてしまうだけ。

仲間が残したはずの匂いも雪と風の嵐の中、一瞬にして吹き飛ばされる。

地上に残されるべき足跡は、まるで生きもののように這ってくる白い新雪という名の化け物により、ついたその直後に埋められ、何も無かったかのような雪原と変わってしまったため、一切何も残らない。

聴覚も、嗅覚も、視覚も一切通用しない、一面の銀嵐。

これが、本当の「冬」なんだ。

想像ではない、本物の冬を肌で感じてその恐ろしさを初めて思い知る。

「生きていく中での試練の1つ」だなんて甘いもんじゃない。これは「生きていく中での最大の試練」だ。

このまま、群れを見つけることが出来なければ。群れの、家族の誰もが彼女がいらないということに気付いて探しに着てくれることがなければ。

この狂ったような白銀の真っ只中に佇み続けていれば。彼女に待っている未来は「死」という単語だ。そう、せつかく生まれてきたこの世界と別れを告げて、たった一頭で「死」という世界

に旅立つこととなる。

そんなのは、絶対に嫌だ。

ソラはともすれば、自分自身の存在でさえ、感覚から消してしまいそうになる激しい吹雪の中、文字通りがむしやらに生き抜く方法を模索し始めた。

今、自分の体力を一番奪っているのは、何だ？

この襲いかかってくる雪と呼ばれる白い結晶か？

……いや、多分違うだろう。確かに体に降り積もるそれは冷たく、体温を少しずつ、だが確実に奪っていつている。

しかし、それよりも自分の「生命力」を奪おうとしているものがある。それは……風だ。

遮るものが何もなく、前後左右、一切関係なく自分に吹き付けてくる研ぎ澄まされた刃のような突風。それが雪よりもはるかに自分の体力を奪い、死の世界へと一歩一歩誘っているのではないだろうか。風さえなければ、自分に降り注ぐ白銀の雪嵐も多少はその勢力を落とすだろう。身を切り刻んでいくと感ずるような、凍てつく寒さも少しはマシになるはずだ。

そうと分かれば、それを避ける場所を探すべきだ。

とは頭の中で理解しつつも、東西南北、前後左右、自分の周りを取り囲んでいるのは、どこまでも続く白一色のみだ。

もしかしたらどちらかの方向に、風を避けられるような針葉樹の林があるのかもしれないが、ソラがそれを探すのを邪魔するかのようには吹き荒れるブリザードによって、まったく視界が利かない。

むやみやたらとそれを探し回って体力を失い、最終的にはこのただっ広い雪原の中で凍死する、という最悪の状況は全く持つてご免である。

となれば、自分で風を避ける何かを作らなければならないことになる、が。

さく。

前足で足元の雪を意識的に踏みつけてみる。

さく。さく。

白銀に、意外と深く埋もれる自分の足跡。

表面はまだ柔らかい新雪だ。下の方になれば多少硬くなっているかもしれないが、やってみる価値はあるかもしれない。

ソラは白い闇の世界を生き延びるため、勢いよくすぐそばの雪を掘り始めた。

足の先が冷たい。冷たさを通り越して、雪が足を切り裂いているような痛みだ。しかし、その痛みもだんだんと薄れ、感覚が少しずつなくなっていく。だがそれにかまってはいられない。何せ自分の命がかかっているのだ。案の定、多少掘り進めた後、雪の層は氷のように硬くなった。ついさっきまでさくさく、と音を立てて軽快に掘っていたものがとたんにガツ、ガツと鈍い音に変わる。そして氷のようにざらついた表面が、柔らかく敏感な肉球を傷つけ、爪にも負担をかけた。

肉球や爪からの出血で、外へと掻き出す雪が真っ白ではなく、薄いピンク色に染まっていく。

それでもソラは生き延びたいという一心で掘り続け、最終的に自分の体がなんとか入るような、小さいけれども無風の雪穴が完成した。ほう、と一息つき、ソラは疲れた体を横たえる。

穴を掘るのにだいぶ体力を使ってしまった。外に出ることが出来ない今、自分に唯一出来ることは体力を回復することだ。一番有効的な方法は、もちろん眠ること。しかし、運が悪ければそのまま目覚めることなく凍死だ。自分が作り上げた雪穴が墓穴になってしまうことになる。

自分の生命力が勝つか。それとも大自然の非情なまでの厳しさが勝つか。

それは次に目覚めた時にしか分からない。

もし仮に目覚めることが出来たとしても、ブリザードが収まって居なかったら、自分はここに足止めされ、下手をすれば餓死、ということになるだろう。

ソラは自分の生命力、運の強さに賭けることにした。

そして雪も風も襲っては来れない雪穴の中、体を出来るだけ丸めるようにして眠りの世界へと足を踏み入れた。

目を覚ますと、そこは見知らぬ世界でした。（前書き）

作者「動物マニア。この話には人間一切出ませんのでご注意ください。」

目を覚ますと、そこは見知らぬ世界でした。

クス。クスクス。

マダ起キナイノカナ？

ドコノ子ナンダロウ？

風ノ子、ジャナイヨネ？

ウン。見タコトナイヨ、コンナ綺麗ナ子。

水ノ子カナ？う。おるくが水辺デ見ツケタンデシヨ？

水ノ近クデ見ツカッタカラ、水ノ子ト決メツケルノハ早インジャナイ？

トリアエズ、コノ子ガ起キタラワカルヨネ。

ウン、ソウダネ。

フワ、フワリ。

なんだろう。

優しくつてやわらかい、気持ちいいものが、まだうつらうつらと夢と現実の狭間を彷徨っているソラのほおをさすった。

顔をくしゅくしゅとなでまわし、まるで起きて、起きてと言っているようだ。

だんだんと夢の世界から、現実の世界へと引き戻される感覚を覚えつつ、気付かれないように気を付けながら、ソラは薄く目を開け、自分にちよっかいを出す何かを見る。

ソラが気が付いたということに気付いていないらしく、ソラの鼻をつんつんついたり、おでこ周辺をさわさわと撫でたりとやりたい放題の「それ」は、今までに見たことのない、恐ろしく変な生きものだった。

まず、鳥のように宙を舞っているのに、空を舞うための翼がない。クモのように、どこからか見えないくらい細い糸でぶら下がっているのかと思ひ観察しても、それらしき糸がない。本来の姿というのが全くないのか、くるくると形が変わる。自分を認識し、喋っているから、耳と口は少なくともあるのだろうが、それらしきものが見つかからない。そして極めつけ。その生きものを通して向こうが見える……そう、その生きものの色は「半透明」という、ソラが生まれて初めて見る色だった。

「……………!?!」

思わずその事実には驚き、多少ぼやくっとしていた頭が完全に覚醒する。

つていうか、ここはどこ!?!

突然ガバツと頭をあげたソラに驚いたのか、奇妙な生きものは「ア、起キタヨ!!」「うゝおるく呼ンデコヨウ!!」と喜びながらもちらじりに宙を舞って去っていく。

その生きものがどういうものなのか気になったが、今、ソラにとって一番重要なのは自分が置かれている立場を確認することだ。

厳しい大自然の中で、生きるために一番大切なこと。それは「自分の置かれている状況を正確に見極めること」なのだといつか、群れのリーダーである父が言っていたのを、ソラは今でも覚えている。妙な生きものの出現と退場に多少気を動転させつつも、今自分が置かれている状況を見極めようと、ソラはゆっくりと今までのことを思い出し始める。

……確か、記憶の中の自分はブリザードという悪魔に白銀の冷酷な世界に閉じ込められていた。

冬という、生きていくなかでの試練の一つを試されている最中に群

れの仲間とはぐれた。それでも生きるために疲弊しきった体に鞭をあてて雪に穴を掘り、そこで体力を回復させるために、うずくまって眠ったはずだ。

眠る前の、全てを凍て尽くすかのような厳しい寒さや、体を切り裂くかのような容赦のない強風の冷たさは、今でもはつきりと思い出される。うずくまった雪穴の中では寒さも風も多少は和らいだが、体に触れる凍った雪の冷たさは、相変わらずだった。

しかし目を覚ましたソラがうずくまっていた場所は、氷と雪に閉ざされていた世界とは全く正反対の世界だ。

足元には色とりどりの花がひしめき合うように咲き誇っており、真上には雲ひとつない、どこまでも透き通った見事なまでの青空が広がっている。

……もしかして、あたはまだ夢の中なのかな。

それとも、やっぱり雪の穴で死んじゃって、ここは死んだ後に来る世界とか？

もしそうだとすれば、あの妙チクリな生きものだって説明出来るし、自分の周りを埋め尽くす、まるで春か初夏かのような優しい雰囲気も納得できる。

しかし、大地を覆い尽くすかのように咲き乱れている色んな花から漂ってくる香りは、夢にしては生々しい。凍てつく雪を掘ったために傷ついてしまった前足の疼きも、やけにリアルだ。

第一、死んじゃってるとしたら、傷も治ってそうなものだよね。

どうやら、自分が今置かれている立場を理解することは、自分一頭だけでは難しいらしい。

誰でも何でもいい。会話の通じる生きものを探して、ここはどこで、自分がどうしてこんなところにいるのか確認しなくては。

そう考え付いて、ふと先ほどの妙な生きものを思い出す。
彼女たちは妙な姿かたちをしていたが、明らかに会話をしていた。
笑いながら宙に散って行ったあの生きものに聞けば、少しはこの
ことがわかるかもしれない。

そういえば、誰かを呼んでくると言っていたっけ。ということ
は戻ってくるよね、きっと。

そのように、少し楽天的に考えたソラの心を読んだのだろうか。

う　　おるく、早く早く！！

綺麗ナ子ダネ。目も空色デトテモ綺麗ダヨ！

先ほどソラの顔に纏わりつき、ちよっかいを出していた変な生きもの
が帰ってきた。

……全く予想していなかった生きものを連れて。

「よお、目が覚めたみたいだな」

そうソラに話しかけてきたのは、まぎれもない、自分と全く同じ生
きものである、オオカミだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7142z/>

The Reath

2011年12月24日01時50分発行